

年間第七主日

マタイ 5・38-48

2020.2.23

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

今日も先週の日曜日に続いて、山上の説教のみことばに耳を傾けました。これらのみことばで、イエスはユダヤの人々には小さい時からなじみ深い、それだけに普段の生活の中では空洞化しやすい、十戒を初めとする旧約の掟を取り上げて、それらの掟に込められた神のみ旨に対する徹底的な従順を説いておられます。これらのみことばを聴く時、わたしたちは性急に、自分には到底イエスが求めておられることは実行出来そうもないと思ってしまうかもしれません。それはそのとおりですが、イエスはわたしたちをそのような思いに陥らせるために、これらのみことばを語っておられるのかどうか落ち着いて考えて見なければなりません。イエスはわたしたちには到底実行不可能と思われる律法を押し付けて、わたしたちにあえて罪の意識を植え付けようとしてこれらのみことばを語っておられるのでしょうか。

先週聴いた福音の中でイエスは「あなたがたの義が律法学者たちやファリサイ派の人々の義に優っていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることはできない」と言われています。事実、イエスは律法学者やファリサイ派の人々のように、殺すなという律法の掟は殺人に限らず直接他人に危害を加えるような些細なことにまで及ぶと教えられるだけではありません。むしろ、先週わたしたちが聴いたとおり、この掟の前に身を置いて、周りの人に対する自分の心のありようを吟味するようイエスはわたしたちに求めておられます。そのような意味で、イエスがわたしたちに求めておられる義は、律法学者やファリサイ派の義に優る義です。けれども、それでは、イエスは律法学者やファリサイ派の人々が当時のユダヤの人々の肩に負わせていたのとは比べ物にならない、はるかに担いがたい重荷をわたしたちに押し付けていることになってしまうのではないのでしょうか。そしてそうなら、福音書を初めとする新約聖書全体が指し示している、わたしたちをあらゆる重荷から解放するイエスの福音と、山上の説教の教えとは全く相容れないことになってしまいます。

この袋小路から抜け出すためには、先程のイエスのみことばに戻ってもう一度考えてみる必要があります。「あなたがたの義が律法学者やファリサイ派の人々の義に優っていなければ・・・」とイエスは言われます。律法学者や

ファリサイ派の人々は、律法の掟を守ることによって義の道を歩もうとした人々です。イエスの度重なる批判にもかかわらず、律法学者やファリサイ派の人々は、少なくとも主観的には律法の掟を忠実に守ることによって、人間が歩み得る最善の義を追求しようとした人々です。掟を守ることによって神の前に自分の義を確立しようとする、このような律法学者やファリサイ派の人々の律法主義に対して、イエスは神の側に立って、神の義を宣言しておられるのです。わたしたちがそれを守れるかどうかということよりも、わたしたちの目を律法の掟を通して示されている神の義に向けさせようとしておられるのです。わたしたちが耳を傾けてきたみことばに込められていたイエスの思いは、今日の福音の最後のみことばにおいて頂点に達しています。「だから、あなたがたの天の父が完全であるように、あなたがたも完全な者になりなさい」。

わたしたちの誰が、天の父である神が完全であるように完全なものでありえるのでしょうか。イエスのこのみことばは、律法学者やファリサイ派の人々の律法主義的な義を完全に粉砕する宣言です。わたしたちがこれまで聴いてきたイエスの新しい掟のみことばは、わたしたちの力によっては実現不可能であることをイエスは宣言しておられるのです。それにもかかわらず、何故イエスはこのようなわたしたちには実現不可能なことをあえて言われるのでしょうか。

「あなたがたの天の父が完全であるように、あなたがたも完全な者となりなさい」というイエスのこのみことばは、わたしたちを天地創造の神、わたしたち全ての者の父である神の懐に呼び戻そうとしておられるかのようです。天地創造のはじめ、神は御自分に似せて人を創造されたのです。わたしたちは神の似姿として創造された者たちであったのです。「あなたがたの天の父が完全であるように、あなたがたも完全な者となりなさい」とのイエスのみことばは、わたしたちを神の似姿としての本来の姿に呼び戻そうとする神の御心を代弁するみことばです。わたしたちの主イエス・キリストはその父なる神の御心を実現するために、わたしたちのもとに来てくださったお方です。復讐してはならない、ゆるしあいなさい。敵をも愛しなさい。愛においては敵などいるはずがない。これらのイエスのみことばは全てイエスが目指しておられる、父なる神がイエスに託された人類の再創造による神の救いのみ旨から発せられているみことばなのです。わたしたちは洗礼によって、イエス・キリストの十字架の死と復活によってもたらされた救いの恵みを受けて、神の子らとしてのいのちを生きる者たちとされたのではなかったのでしょうか。

わたしたちの間のいたるところで繰り返されている、復讐が復讐を生み、敵味方に分かれて合い争う、人間の品位のかけらも感じられないこの世のありさまから救われる道は、わたしたちにはあまりにも理想主義的に思われるイエスの呼びかけに、わたしたちが応えることが出来るかどうかにかかっています。

わたしたちには不可能と思われる道へとイエスはわたしたちに先立って進み行かれ、そのみあとに従うようわたしたちに呼びかけておられるのです。その道は、わたしたちが知っているとおりに、十字架の道以外にはありません。自分を十字架につけた者たちに一言の恨みも吐かず、彼らのためにゆるしを乞うて、十字架の上に死なれたイエスは、身をもって、わたしたちが聴いてきた山上のみことばを生き抜かれたのです。不可能を可能にするのは、ひとえに愛です。イエスは神の子としての御自分の愛をわたしたちに示し、その愛にわたしたちを招くために、山上の説教で示された道を歩み通されたのです。わたしたちがイエスの求めに応えることが出来るとするなら、そのあまりにも困難と思える道を歩み通すことは、イエスの十字架において示されている、神のわたしたちへの愛を受け止めることによってのみ可能となるのです。わたしたちが求めるべきことは、イエスの求めにわたしたちが応えるための力であるよりは、このような困難な道にわたしたちを招くイエスへの愛と信頼です。イエスが求めておられることがいかに困難で、わたしたちには不可能と思われようとも、イエスがわたしたちの中に灯してくださった愛の炎がわたしたちの中に燃え続けることを、わたしたちのすべてを知ってくださるイエスに願い求めて行きたいと思えます。